聖ウルスラ学院英智報

ウルスラ　英　智　（臨時号）

令和２年10月　vol . 41 号

新型コロナウイルス感染防止策の中で生きる

（対応の記録）

お寄せ頂きましたご支援に感謝いたします。

たくましく学び続けてまいります。

未来に希望を持ち続けてまいります。

目　　次

頁

巻頭言　理　事　長　梶田　叡一　・・・1
～自分をしっかりと持つ～
特別寄稿　学校法人聖ウルスラ学院名誉顧問
仙台伊達家第十八代当主　伊達　泰宗　・・・2
～試練とともに道は拓かれる～

挨拶　小・中学校　高等学校　校長　伊藤　宣子　・・・3
幼稚園　園　長　佐取美智子　・・・4
幼稚園
園児たちを守る　主任　庄子　美和　・・・5
園児たちの今　写真でみる元気な姿　・・・6
小・中学校
新型コロナウイルス感染防　教頭　鹿野紀幸　・・・8
（学校運営と児童・生徒）
高等学校
怒涛の半年　教頭　鎌田　聡　・・・10

聖書のみ言葉を語る「すべてに耐える日々」
宗教教育委員会委員長　教諭　山口葉子　・・・12
子どもたちはこの時をどう観ていたか　・・・13
（５月休校中の「宗教」の課題作文）
小・中学校　スクールカウンセラー　清海綾子　・・・15
談室から見えた児童・生徒たち
高等学校　スクールカウンセラー　水谷直美　・・・16
次の２波に備えて思うこと
小・中学校　養護教諭　摺澤みや　・・・17
高等学校　養護教諭　大学佳乃子　・・・18
第２波の到来に備えて思うこと

報告と感謝（編集後記）
法人事務局長　髙橋直見　・・・19

【ウルスラ学院報 2021　巻頭言】

自分をしっかりと持つ　――　コロナ禍に負けない児童生徒に

理事長　梶田 叡一

2020 年と 2021 年という年は、新型コロナウィルスによる感染症（COVID-19）が世界的に蔓延した特異な年として歴史に刻まれることになるでしょう。WHO（世界保健機関）がパンデミック（伝染病の世界的大流行）に至っているとの認識を示したのは 2020 年の 3 月 11 日のことでした。

有効なワクチンや治療薬が普及しないままの状況では、人と人との接触を少なくして感染機会を減らすしか対応策がありません。人々は自宅での蟄居（ステイホーム）を余儀なくされ、外に出ても「三蜜」回避やマスクの着用、会食や集会の制限等の自粛が当然視されました。このため、飲食や観光、運輸などに関連した社会経済活動は大幅に抑制され、まさに「ありえない」ほど落ち込んだというニュースが飛び交いました。また事務所などでの仕事の仕方も、リモート勤務やウェブ会議など直接人が触れ合わない形での業務遂行が拡がりました。学校も、幼小中高から大学まで 2020 年の春先には全国的に休校措置が取られ、その後も遠隔授業を強いられたり、学校行事が次々と中止になったり内容・方法を大きく変えざるを得なかったりと、教育活動に大きな制限を受けることになりました。

しかしながら、我々は負けるわけにはいきません。特に教育関係者は、子どもと社会の未来に責任を持たなければならない者であって、こうしたコロナ禍の騒動に流されていくだけであるわけにはいきません。子どもや若者が、そして我々自身が、自粛自粛の中で不活性になったり、対話や談笑から遠ざかって孤立し鬱（ウツ）的になったり、その日暮らし的になるままであってはならないのです。むしろ逆転の発想をもって、こうした厳しい状況であるからこそ、それに負けない強い子ども達を育成していく、といった得難い教育機会にしていかねばならないのではないでしょうか。

子どもたちにも当然のことながら、生活の各側面において自粛が求められます。このことは、自分自身を厳しく律するための良い訓練の機会となるでしょう。マスクをしなくては外に出られないのです。外でも内でも友達と好きなだけ遊んでいるわけにはいかないのです。スマホでのおしゃべりに時間を忘れたり、ゲームに嵌まり込んだり、といった無計画な時間の過ごし方も許されないのです。勝手気ままに走りそうになる自分自身を見つめ、引き締め、コントロールしていかなければならないのです。

こうした日常的訓練がうまく行くよう、親御さんも先生たちも子ども一人ひとりに十分目を配り、その子が自分を引き締めつつ生活していくよう指導し、励ましていかなくてはなりません。ミシェル・フーコーが強調するように、こうした自分自身を見つめ律することの訓練は、古代のギリシャ・ローマからキリスト教に流れ込んでいる大事な伝統でもあるのです。彼は「自己のテクノロジー」と呼んでいますが、自分自身にどう対応し、自己をどうコントロールしていくかです。挨拶の励行から始まって、生活の要所要所でのケジメのつけ方、そして自分自身を振り返って反省する自省自戒の習慣づけ等々、キリスト教の伝統に立脚する聖ウルスラ学院英智としても、改めて指導に力を入れていきたいと思います。

「禍(ﾜｻﾞﾜｲ)を転じて福となす」という言葉があります。コロナ禍という災禍に遭遇した今こそ、新たな希望と決意を奮い起こしたいものです。そして、児童生徒一人ひとりの人間的成長を図る、という聖ウルスラ学院英智の教育的取り組みを、ご家庭の皆様をはじめ関係者の方々と心を合わせて、一層推進していきたいと思います。

学校法人聖ウルスラ学院名誉顧問
仙台伊達家十八代当主　伊達　泰宗

試練とともに道は拓かれる

～新型コロナウイルス感染防止策の中で生きる～

まだ高校生の頃「心には天秤を持ち、頭には羅針盤を据えつけよ」と教えてくれた方がありました。

これからの人生には想像もできないような困難や苦しみが待ち受けているかもしれない。人間の心とは天秤のようなもので、有頂天になれば右に傾き、絶望すれば左に傾いてしまう。どのような状況に置かれても常に心の天秤は平らかでなければ、正しき道を進んでいくことはできない。時には回り道をしなければ押し流されてしまいそうな濁流や一歩踏み外せば奈落へと転落してしまいそうな断崖絶壁に道を遮られることもあるだろう。そのようなときは、目的地に至る別の道を選択しなければならない。頭に据え付けた羅針盤を信じて時間をかけて遠回りすることも必要である。この言葉は私にとって現在もなお「明日への道を拓く」大切な指針となっています。

聖書の中にも「神様は真実な方です。あなた方に耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、むしろ試練と共に耐えられるよう逃れる道も備えてくださいます」との一節があります。

この二つの言葉はいずれも困難に直面し道が閉ざされようとも、自分がやるべきことに向かって全能力を尽くしたならば、必ず道は拓けることを教えてくれているように思います。

新型コロナウイルスの世界的な感染蔓延により、今後社会環境がどのように変化しようとも、学校の持つ役割は決して変わることはありません。生徒一人一人が、いつも心の天秤を平らかにして、どのような状況になろうとも自らの羅針盤を硬く信じて、この困難な時期を乗り越えていただきますよう心から願っております。

聖ウルスラ学院英知小・中学校　高等学校
校　長　　伊　藤　宣　子

２０２０　聖ウルスラ学院英智の教育底力
「教育の強靭化」開始宣言

当に国難とも云える新型コロナウイルスの感染拡大が小・中学校、高等学校の休校要請・実施、卒業式の取り止め、入学式の延期、取り止めなど、高度な現状分析が求められ、日々前例のない判断と実行に汗する日々
あらゆる手立てを使って「子どもたちの健康と教育を守れる環境」を構築しよう。
折しも、
ここ数年、不確実な未来に対応できる「21 世紀型人間力を育成」を教育方針に掲げ、学校改革を推し進め、実際、子どもたちに「そうなれるために学びなさい」と説いてきた。
だから、「不確実なこの状況に対応してみせる」学校の機能拡張や知恵を出し合い解決に向かう大人たちの姿を示すことも「教育」そのものではないだろうか。
だから、
この度の　半ば強制的な防疫措置や施策は、命の輝きを考え、共同体として生き抜く力を考える学校が強くなるための「きっかけ」とすべきではないだろうか。
子どもたちが「学校外でも通常授業が受けられる環境」
学校での教科学習と家庭学習の連動性がもたらす教育効果が輝く
ＩＣＴ教材と新たな活用の可能性・・・等
進学校という強みを活かした
ＡＩに負けないＳＴＡＥＭ教育、プログラミング教育、データサイエンス教育・・・も
今、更に
「人間力の涵養」を目指しさらに強靭で先進的な強い学校に成長します。
共に　強くかつ熱くあろうと行動する大人の姿を、子どもたちに見せましょう。

教職員のリモートＷｏｒｋ
　教職員の仕事が「学校に来ないとできない仕事」と場所を問わない業務」
　に切り分けることができるなら、教職員の働き方を激変させることが可能か。
　今までにないマネジメント意識やモチベーションが芽生えるかも。
　「これまで、こうやってきたのだから」は変わる。

動画を活用した生徒募集広報　オンラインＯＰＥＮ　ＳＣＨＯＯＬ
今後のプロモーション活動の在り方を見直す必要あり。
打開策のヒントに「動画」があるはず。ｅラーニング。

聖ウルスラ学院英智幼稚園
園　長　　佐取美智子

～コロナ感染の中で～
☆園児たちを守る☆

６月からは分散登園、そして７月から一斉登園（通常保育）がはじまりました。マスクをつけての登園は、子どもたちの心にもマスクをつけたようで、初めは表情が分かりにくく、挨拶の声もはっきりしていませんでした。

しだいに、マスク生活にも慣れ、友だちと一緒にブロック遊びや製作、ままごと、戸外ではマスクを外して走り回り、砂場遊びなど、明るく夢中になって遊びが展開されるようになりました。たまにマスクが外れていたり、子ども同士の近づき過ぎが心配になることも多いのですが、その時は、教師が密にならないようにさりげなく声をかけ、また、換気にも気をつけ、そして、降園してからは、遊具すべての消毒をします。

子どもたちにとり、遊びは生活そのもので、遊びの中でさまざまな事を体験し学びます。全身を使い思う存分遊べるよう、安全衛生面には充分注意しながら、感染症と向き合っていかなければなりません。たくさんの楽しい行事もできない今、一つ一つの行事・活動を見直し、その活動を通して、子どもたちに何を育みたいのかを捉えて、工夫しながら歩んでいかなければなりません。日常生活の遊びの中で、子どもたちが学べる貴重な体験を、感染症のために失うことのないように、そして、この時期だからこそ学ぶことも多いはずです。私たちは、子どもたちと共に、大変なこの時期を良い機会と捉えて、前向きに歩んでいきたいと思います。

聖ウルスラ学院英智幼稚園
教　諭　庄　子　美　和

「2 月以降の運営・教育現場」

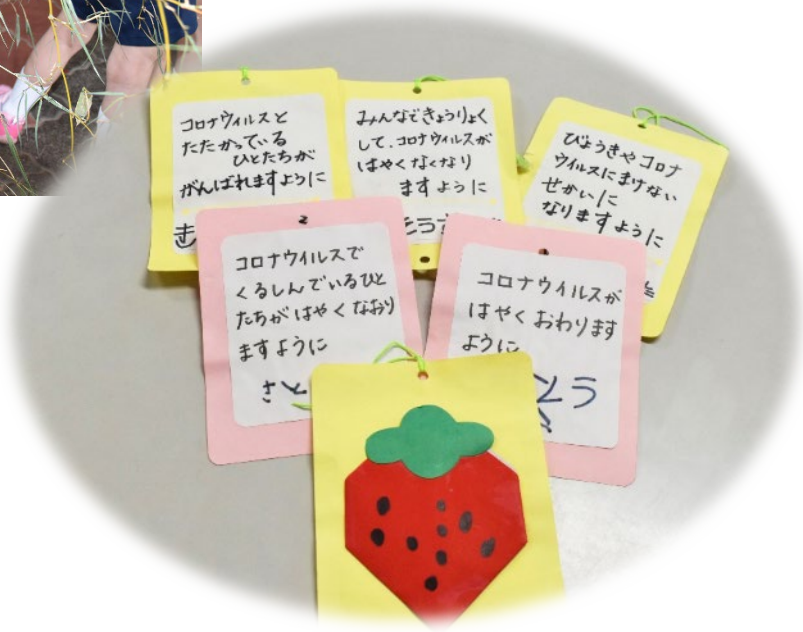
２月以降、新型コロナウイルス感染症の感染拡大をうけ、幼稚園では子どもたちの安全を第一に考え、感染防止策に努めてきました。一つは、3 月から 5 月までの臨時休園の間に、休園中も行っていた「預かり保育」の安全や保育再開後の安全対策の準備、また家庭との連絡をとることなど、その時に必要な対応を行ったことです。

もう一つは、２ヶ月間幼稚園を離れている在園児と、園生活を経験していない新入園児に対するものです。園や担任の先生を近くに感じ、園生活の始まりを楽しみに待ってほしいという思いを込めて、「はがき」と「手作りカード」を送ることにしました。また、６月から３クラスずつの分散登園で保育を再開した際は、登園クラス以外の職員が遊びや生活面のサポートをして子どもたちの不安や緊張を和らげるよう心がけました。このような時だからこそ、いつも以上に子どもたちや家庭に寄り添った保育が必要だと感じています。私たちが思っていたよりも子どもたちは元気に幼稚園生活をスタートし、特に進級児は久しぶりに友だちや先生に会えたことを喜び、楽しそうに遊んでいる姿が印象的でした。

コロナ後の「新しい生活様式」は、園生活の中で徐々に浸透しつつありますが、子どもたち同士の触れあいにつながる行為のとらえ方など、未だに課題は絶えません。できる限り感染防止のためのルールで子どもたちを縛らず、状況を踏まえた柔軟な対応を心がけながら、安心できる園生活を行っていきたいと思います。

☆幼稚園で取り組んでいる様子です。

コロナにかかった人がはやくよく
なりますように・・・
子どもたちも、短冊に願いをこめていました。



お昼の時間は、アクリル板を
使用しています

トイレを待つ間や、手洗い・うがいをするときは、間隔をあけて並びます。

聖ウルスラ学院英智小・中学校
教　頭　鹿　野　紀　幸

～新型コロナウィルス感染拡大防止に向けて～

2月以降の小中学校の運営・教育現場

新型コロナウィルス感染症拡大防止（以下「コロナ」）の対応に関する学校としての動きは、具体的には2月26日に首相から出された全国一斉臨時休業要請から始まりました。その時の情報や状況下でまず校長から打ち出された「卒業式の縮小開催」と「修了式前日までの臨時休業」は、我々教員にとっても衝撃的でしたが、今思えば適切な初動だったと言えます。そして、ここからの3か月間は本当に試行錯誤の連続でした。この原稿執筆の話が来てから改めてこれに関する保護者あて文書や一斉メール配信を遡って確認したわけですが、出した文書の量もさることながら、一度決定したことを変更することも多く、ご家庭では困惑したことも多かったと思います。しかも、児童生徒や保護者の方々と顔を合わせることなく、ただただ文章で伝えるのみでしたので、私たちの試行錯誤はもとより、ご家庭でのご苦労は本当に相当のものだったのではないでしょうか。それにもかかわらず、皆様には一から十までご協力いただき、時には励ましいただきまして、心から感謝いたしております。

さて、この期間の動きについて語るにあたっては、大きく3つの期間に区分するのが良いだろうと考えました。一つ目の期間は前述の2月末から修了式を含む3月いっぱいです。この時期は一斉臨時休業を受け、ひたすら事態の収束を待つといった期間でした。残念ながら卒業式や立志式は変更や中止になったものの、幸い学年末考査が終わっていたこともあり、希望を持ちつつ粛々と過ごしていた気がします。まだ東京オリンピック・パラリンピックの通常開催が謳われていたこともあり、おそらく日本中が新年度は通常に戻ることを、実は疑いながらも希望していたと思います。実際、国内の新規感染者数も減少傾向にあり、本校では修了式も放送でながら無事に済み、新7年生の入学説明会と学力テストも行うことができました。しかし、ちょうどそのころ東京五輪の延期が決定し、それを皮切りに新規感染者が増加傾向に転じることになり、有名人の相次ぐ訃報も手伝って、一気に状況が変わりました。そんな流れの中で新年度を迎えるという二つ目の時期に入ります。暗転の中でも、始業式・入学式は4月9日のそれぞれ午前・午後に、その後の登校は5月まで週一回という限定的なものながら予定されていました。4月6日までは…

4月7日、始業式・入学式を20日に延期することについて一斉メールでお知らせすることになったわけですが、結局その20日の開催もかなわず、中止ということになりました。しかしながらこの期間、校内では一つの大きな変革の動きがありました。それはICT活用に関するものです。ICTの活用に関しては「コロナ」対策以前に本校としても徐々に充実させていこうと考えて、例えばiPadの所有台数を60台増やしていたわけですが、オンラインでの情報共有や授業などについては未開発でした。そこで、まずは「各家庭のインターネット環境に関する調査」から行ったところ、当然のことながら種々の心配も届きながらも、やはり「この時代、利用すべきだ」という声が大多数であることを受けて、それまで郵送で行っていた課題のやりとりをネット上で行ったり、授業動画を作成してYouTubeで配信したりするなど、積極的なICT活用に舵を切ることになりました。これにはある保護者様からいただいたお言葉によって、この動きが加速したことも付け加えたいと思います。－*生徒に、自分一人で課題に取り組んでいるという感覚を生ませないためにも…*－そこで、それまで行っていた式典の動画

配信に加え、校長からのメッセージ、石澤先生によるウルスラ体操の配信から始まり、各ステージごとのポータルサイトの開設と Edmod、Google Classroom の利用など、次々に動き出す三つ目の時期に入ります。

5 月連休明けから具体的な ICT 活用が始まったのですが、中でも我が情報教育主幹の清水先生が考えた各ステージのポータルサイト開設は、正に画期的なものだったと言えます。教員による授業動画の作成は、慣れていないということもあり時間のかかるものでしたが、それでもなんとか予定通りの数の動画をアップさせ、児童生徒に見てもらうことができたと思います。加えて中旬からは zoom による「オンライン学活」なども企画し、画面を通してながら久しぶりに子供たちの表情が見られたことは、私たち教員にとってはこの上ない喜びでした。5 月後半には分散登校も実施することができ、ようやく 6 月 1 日からの学校再開にこぎ着けました。再開後もしばらくは 9:20 登校や時差下校でしたが、7 月にはほぼ通常登校ができるようになりました。

この 3 か月間を振り返って改めて思うのは、皆様への感謝です。様々なことにご協力いただいたことはもちろん、メールやアンケートなどのリアクションで多くのヒントや励ましをいただきました。前述の言葉もそうですが、新入生の保護者様からは「あの綺麗なグリーン広場での入学式も思い出に残るかもしれませんので、検討してみてください」という声もいただき、果たせなかったものの前向きな気持ちになれたものでした。また、アンケートの中の「今回のコロナの情勢は、ある意味で本校にとって他校との差別化のチャンスです。公立校には真似できないスピード感で前進していただくことを期待しています。」にはグンと背中を押していただきました。

まだまだ予断を許さない状況が続きそうですが、この時期の感謝を忘れずにこれからも学校運営を行っていきたいと思います。ありがとうございました。

聖ウルスラ学院英智高等学校
教　頭　鎌　田　　聡

学校現場の「怒涛の半年」

2020 年がこのような事態になることを誰も予想できなかったであろう。突然の 2 月 27 日の新型コロナ感染症対策本部で総理大臣より 3 月 2 日から春季休業の開始日まで全国の学校への休校措置を要請され、本校も急きょ対応に追われたことを今となってはずいぶんと前のこととして思い出す。卒業式は大幅に簡略化され卒業証書授与は代表生徒のみ、卒業生の言葉、参列者は該当生徒および教職員、卒業委員会の保護者のみの参列となった。高校三年間の卒業の余韻に浸る間もなく、別れを惜しむ間もなく下校となり、成長した姿のお披露目の場としてはさみしいものに感じた。在校生は学年末考査を終えたばかりでそのまま休業となっていった。ただ、修了式に向け、教師は生徒がいない中で単位認定に向け成績処理を行い、学校再開後のことを考えていた私にとっては、この時点では生徒が通常登校しともに活動したい思いを強く持ちつつも、政府の要請に応じて「長い春休み」を取っている気分であった。

3 月 17 日付けで文部科学省から春季休業期間中の教育活動についての追加方針が出されたものの、本校は学年末考査終了後であり、一週間分の授業がなくなったものの単位未修得者への対応が主であり、大幅に生徒の学習に遅れが生じたわけではなかった。すぐに再開し「遅れを取り戻す」ぐらいの意識であり部活動等諸活動も 3 月の感染拡大の様子を見ながら月末から活動することを考えていた。修了式は各教室放送にて行われ、全校生徒が介することなく 2 時間以内での学校滞在となり、試験答案の返却や春季休業期間の過ごし方等の指示が行われた、大変簡素な年度末の締めとなり、新入生登校の対応は、新入生どうし間隔を取り全員マスク着用を義務付け、換気に配慮し、使用場所の消毒をしながらといった感染防止対策を講じながらも、互いの顔が見えにくい中での必要最小限の短時間でのガイダンスを行い、学力試験も距離を取りつつ行い学力状況の把握はできたといったように、この時点では例年通りの年度末の動きが行われ新入生を迎える準備を着々と進めていた。

4 月からの学内での活動に備えその対応について検討していた矢先、コロナ感染拡大に伴う緊急事態宣言が出され、本校でも連休あけまで全ての活動自粛となった。4 月中旬からも登校させることができない事態に、学校に集まって行う入学式・始業式は中止。入学式に代わり、期待を膨らませ心待ちにしている生徒たちに離れてはいても「学校への強い歓迎」の思いを伝えたい一心で校長式辞や担任紹介などを動画配信で行うことを決め、入学許可書を郵送し慣れない動画撮影が行われ、始業式は実施せず進級認定書を郵送し、紙面にて新年度が開始することとなった。同時に学びの保障に向け学習支援に向けた動きが本格化した。課題作成、そしてその郵送を終え、次にオンラインでの動画配信に向け、慣れないことに悪戦苦闘しながら教師一人一人ができることを共有し合い、講習会を開いて不得手な教師への援助を行いつつ、それぞれの教師が徐々にスキルアップしつつ、うまくいかないことも多い中での手探りの配信ではあったが、家庭学習するための支援のツールの一つになったようである。また、同時に健康状況の確認と日常生活の様子等、電話やオンラインで生徒の状況把握に努めたことで、「学校に行きたい」「仲間に会いたい」思いが出てきた一方で、感染に対する不安、自粛ということからの学習や生活に対する不安、新たな生活に対するストレスなど、生徒が様々な思いの中で日々生活している様子が伝わってきた。多くの教師が生徒一人一人と何らかのつながりを持てたことに安堵していた。

5 月に入り、月末までは学校休業が打ち出され、時間割作成がなされ試行錯誤してきた学習支援の動画配信を計画的にスタートさせることができた。また、同時に休業期間が長期に及んだことによる影響を踏まえ、分散登校のあり方、6 月以降生徒を迎えるにあたってこれまでとは異なり取り組んでいくことになる学校生活のしかたについて検討が始まった。感染拡大防止対策を講じながら、マスク着用や手の消毒、換気やソーシャルディスタンスの確保など「新しい生活様式」を遵守しつつ、可能な限りの学校活動ができるようこれまでの活動を一つ一つ検証し、諸活動の中止や精選、そして内容の制限等の検討が行われていった。学内消毒など、これまでにない生活様式に教師自身すら正直戸惑いを隠せないこともあったが、どのように行っていけば良いか知恵を出し合い、生徒を迎える準備と並行して動画配信を行っていたことで、教師の仕事が非常に多くなった時期でもあったが、「生徒を迎える」ことでモチベーションを保っていたように思う。

6 月からの完全学校再開に向け、5 月末から分散登校が始まった。生徒・教師ともに再開を喜び合い互いに試行錯誤しながらの「新しい生活」が始まった。自宅待機期間が長かったことで様々なことを抱えての再開となったが、時間経過とともに生徒・教師ともにこれまでにはない対応があり、戸惑い等も重なって疲れが見えた時期もあったが、父母教師会の御協力やカウンセラー等の支援も頂き、面談等も行いながらそれを乗り越えて今の生徒たちがいると感じている。毎朝生徒たちのマスクを着用していることを確認し健康観察を行うため昇降口に立っているものとしては、学び舎に子どもの声があることに安堵し生徒に向き合いともに様々な活動ができることに感謝している。一方で、授業時間の確保のために夏季休業等の短縮や行事の中止・縮小があり、さらに外部大会や諸活動の中止も相次ぎ、生徒の活動・活躍の場に制限があり生徒の持つ力を発揮する機会が少ない上に、教師も生徒も「時間」に制約され、どうしてもこれまで取り組んできたことと比較して教育効果や活動実績・内容に影響が出てしまうことには残念な思いもある。しかし、「変えられないものを受け入れる心の静けさと、変えられるものは変える勇気と、その両者を見分ける英知をわたしに与えてください」（ラインホールド・二―バー）この祈りの中で日常を再構築し活動をしてほしい、特に卒業学年であり予定が立てにくく先が見えない不安と戦いながら日々過ごしている高三生は進路実現に向けてこのようなコロナ禍の中だからこそ、力強く逞しく突き進んでほしいと願っている。

聖書のみことば

「愛はすべてを望み、ずべてに耐える。」

使徒パウロのコリント信徒への第１の手紙 13．7

教諭　山口　葉子

～「すべてに耐える日々」～

ここ数カ月、パンデミックが収まらず気が晴れない日々が続いています。子どもたちにとってはさまざまな制限下で「がまん」の日々です。6 月、ようやく学校が再開しても以前のようにできなくなってしまったことや、以前はしなくてもよかったのに今はしなければならないことがたくさんあり、新しい生活様式に慣れるのはほんとうにたいへんです。

先日は、市中総体の代替え試合だった「陸上競技記録会(7/19)」が宮城県下の急速な感染拡大により前日になって急遽中止となってしまいました。楽しみにしていた 9 年生（中３）の K 君にとって最後の大会が突然終わってしまったのです。K 君はこの春、足に大ケガをしましたが、松葉杖が取れてからは熱心にリハビリと練習に励み、雨で外での練習ができない日は職員室前でトレーニングをしていました。毎日職員室前を通る先生方から激励を受け、さらに見かねた小学校の先生も職員室から出てきてその場で熱血指導をしてくださり、その結果ぐんぐんタイムが上がり今度の記録会では良い結果が期待できるまでに上達しました。その矢先の中止の連絡…。職員室中に深い嘆息がもれました。K 君には何て伝えよう…先生方は、掛ける言葉がありません。

思えばこれは陸上部だけではありません。すべての運動部、文化部、全国の小中高生たち、そしてオリンピック選手がこの夏経験したことでした。確かに長い人生には「あきらめなければならないこと」がある、しかし、それを子どもたちが学ぶにはあまりに辛すぎる経験です。

> 愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。
> 礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。
> すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。愛は決して滅びない。
>
> Ⅰコリント 13：4～8

「K 君には何て伝えたんですか？」「K 君は、あれからどうしていますか。」この２、３日ずっと気になっていたので顧問に尋ねてみました。すると先生はこう教えてくれました。

「あの日、K 君には事実をそのまま伝えたよ。彼は『えーっ？』とひとこと言ったっきり。しばらくその場で固まっていたけどね。でもそのあとは、気を取り直していつも通り一生懸命練習していたよ。後輩たちの指導や面倒もよく見ている。彼は今も変わらずがんばっている。」と。

よかった…。部活をする意味は試合に出ることだけではない。仲間と共にいること、同じ目標に向かって自分を信じ仲間を信じて努力する時間を共有することのほうが、K 君にとってははるかに価値のあることだったのです。こんなすがすがしい K 君もまもなく陸上部を引退します。

「災害の『意味』は変わっていく。時間とその人の生き方で変わっていく…。」

私たちの「がまん」の日々はこれからも続きそうです。しかし、どんな困難の中にあっても、そこに働く神様がきっと「良いもの」に変えてくださいます。

神様の愛のうちに私たちもお互いを思いやり、励まし合いながら希望を持って生きることができますように、この困難の時を共に乗り越えていきましょう。

（小・中「学校だより 7 月号」：再掲一部加筆）

一本杉キャンパス宗教教育委員会委員長　　山口葉子
聖ウルスラ学院英智高等学校
教　諭　山　口　葉　子

小・中学校　「こどもたちは、この時をどのように観ていただろうか」

5月（休校中）「宗教」の課題で書いた作文より

8年　土屋和心美

私は、新型コロナウイルスの流行を通して、過去に起きた感染症（SARSなど）の流行や感染症の怖さを十分に感じ、知ることができました。私は今回のことを通して、まさか自分が生きているときにこんな大変なことが起きるとは思ってもいませんでした。日々何が起こるかわからないし、あたりまえの生活などいつできなくなってもおかしくないのだと思い、たくさんのことに感謝をしながら生きていきたいと改めて思いました。そして、感染症がどれほど恐ろしいものなのかも改めて考え直せたと思います。一瞬にして広がり、たくさんの人を苦しめ命を奪っていった新型コロナウイルスは一生忘れることはできないです。良い意味で「人生の学習」になったと思います。

8年　渡部響

今、世界では苦しい状況がいろんなところで起こっていて、それを解決するためにいろんな人たちががんばっています。医療関係の人たち、政府の人たち、こんな状況の中でも、日本を支えるために働いてくださっている皆さんや自分たちでできることを探してそれを実行する人たちなど、その方々のおかげで今こうして生きていられると思うと感謝の気持ちでいっぱいです。それと同時に日本のいざとなった時の実力を実感し、改めて日本という社会はすごいと思いました。今、世界に必要なことは、この危機を乗り越えるための協力しあう気持ちと柔軟な考え方だと思っています。常識にとらわれずに今の社会に必要なことを考え、それをするためにたくさんの人の協力が必要だと思います。このピンチを乗り越えればさらに豊かな社会になると思います。今のピンチをどう生かすか、それによってさらに発展し、良い日本になるかもしれません。ですから、今は苦しいことをがんばって自分が今しなければいけないことを探し、助け合っていきたいです。

９年　太田匡亮

コロナウイルスが流行し、思うように外出や部活動ができなくて、苦しい状況になっているからとても悔しい。ウイルスは目に見えないものなので恐ろしいし、たくさんの方が感染し、亡くなっているというニュースを見ていると、とても胸が苦しくなる。しかし、こういう苦しいときだからこそお互いに高められることがあると思う。家庭のごみを回収してくれる人、スーパーの店員さんなどが働いてくれているおかげで世の中がまわっているのだと思う。これからは、地域、県、国が助け合い協力して、この状況をよくしていけたらいいと思う。

９年　阿部　紗英佳

自分が生まれてきてからこれまで、今回のような全世界に混乱を招くような事態はあまりなかったので、この出来事を知ったときすごく不安な気持ちになった。しかし、今回のような状況に陥っても、今の生活を快適に過ごせる工夫や、感染を防ぐ対策がいろいろなところから広まった。このように、

不安に感じる状況になっても、その中でどれだけ自由に過ごせるか考えるのは身体的にも精神的にも大切だと思った。

9年　長沼樹保

新型コロナウイルスには、3 つの顔がある。ひとつは「病気そのもの」、２つめは「不安と恐れ」、３つめは「嫌悪、偏見、差別」である（日本赤十字社公式 HP より）。私は３つめの「嫌悪、偏見、差別」をなくすことがコロナ収束の第一歩になると考えている。2 月頃にアジア系の女性が暴行を受けるという事件がニューヨークで起こった。私はこのニュースを見てとても悲しい気持ちになった。こういう事態になったからには協力が大切なのに差別が起きるのは絶対に起きてはいけないのだ。これは海外だけの問題ではない。日本ではコロナが完治した人やその家族に対しての差別が起きている。今は協力が大切な時期だったが差別する人たちは 3 つの顔の２つめである「不安と恐れ」を感じていて、それが表面化した結果が差別などの行為なのだろう。しかし、それが差別をしていた理由にはならない。「嫌悪、偏見、差別」をなくすには、まず人々から少しでも「不安と恐れ」が取り除けるのかが重要になるのだろう。

９年　堀　心海

コロナウイルスが収束せず、すっと家にいる毎日で感じたことはたくさんある。まず中学校最後の大会（全国中学校バドミントン大会）が中止になった。私は自分の努力不足で７年、８年とほぼ試合に出られなかった。９年になってやっとの思いで試合に出られるようになり、「これからだ」という時に大会がすべて中止。とても悔しかった。今では７年、８年の頃の努力不足がとても悔やまれる。顧問の深瀬先生は一からダブルスを教えてくれて、他県の選手にも負けないほど強くしてくれた。時には厳しく叱ってくれたり、ほめてくれたりして、私を成長させてくれた。そんな深瀬先生とも大会がないまま練習が終わってしまうことが悔しくて悲しい。本当に深瀬先生には感謝しかない。まだまだ書ききれないほど、いろいろな思いはあるが、日常はあたりまえではないこと、いつ消えるかわからないことを知った。

～相談室から見えた子供たち～

聖ウルスラ学院英智小・中学校
スクールカウンセラー　清海綾子

これまで様々な状況下でカウンセリングをしてきましたが、今回のコロナ禍のような事態がまさか自分の身近なところで起ころうとは思ってもいませんでした。当初は戸惑うばかりでしたが、皆さんに安心して相談に来ていただけるように、消毒・換気・マスク着用などの対策をとり、とにかく安全確保に努めてきました。おかげさまで、現在のところは、例年と変わりなくカウンセリングを実施できています。

ただ、これまで経験したことのない日々を過ごす中で、私自身、改めて「想像力」の大切さを強く感じるようになりました。想像力は、相手を思いやることの源泉です。そのことを特に実感させられたのは、先の東日本大震災が起こった時でした。当時、それぞれが想像力を働かせて、耐え忍び、互いを思いやり、痛みを分かち合い、励まし合いながら、現在まで少しずつ歩みを進めてきました。それが今度は新型コロナウイルスという肉眼では見えないものに悩まされることとなり…。非常に残念ではありますが、こういう時だからこそ、余計に、目には見えない心の痛みや、見えないけれど大切なものを想像する力が必要であると思います。そして、温かな言葉を伝え合い、優しい人間関係を築いていくことが苦難を乗り越える力になると信じています。

最後に。不安やストレスを感じているという方は、ひとりで抱え込まずに、一度お話にいらしてください。微力ですが、カウンセラーとして、いつも皆さんと共にありたいと願っています。

次の波に備えて思うこと―相談室から見えた生徒たち

聖ウルスラ学院英智高等学校
ｽｸｰﾙｶｳﾝｾﾗｰ　水谷　直美

あっという間に前期が終了する今、SC の眼に映ったこの半年間の生徒たちをお伝えしたいと思います。

2 月末、相談室・保健委員会では昨年同様に、生徒たちが日常生活を振り返るきっかけになればと「インターネット依存テスト」を行ったばかりでした。まさかその直後から、ネットがこれほど急速に私たちの日常に深く関わることになるとは予想もせずに。その後、コロナ禍による休校・再開後、相談室での会話にはネットとの関わりが頻繁に登場することになりました。オンラインでのホームルームや学習が続いた結果生じた、友人関係や学習進度への不安、リモートワークなど就労形態の変化と家族の関係、SNS 上のことなど、さまざまです。今後、いわゆる日常が完全に戻ったとしても、社会のネット利用の形はコロナ以前とは明らかに違うものとなり、「依存」とともによりよい「付き合い方」も一緒に考えていくことになるだろうと思われます。

ところで、再開後の 6 月から、相談室はそれはもう「大忙し」でした。「話したい気持ち」をその時に受けとめようと、1 校時を半分に、25 分ずつ面接したこともあります。そんな日々の中で、「結局人は、直接対話することの意味を忘れるわけではない」ということも再確認しました。それは、生徒だけではなく私自身も同様です。たとえマスクのため互いの表情がわかりにくくても、ソファの距離が以前より遠かったとしても、行事がなくなってしまった学校生活のこと、ステイ・ホームの日々で発見した新たな自分のことを直接誰かに伝えたくて、相談室にも、隣の保健室にも生徒たちは来ています。

これまで誰も経験したことがなかったことが起こったこの半年、生徒たちは感染への怖れ以外にも様々なストレスに直面し、そこから人との関わりについて多くの気づきを得たようです。次の波がきたとしても、孤立も分断も避けながら乗り切る道を一緒に探りたいと思っています。

聖ウルスラ学院英智小・中学校
養護教諭　摺　沢　み　や

未知の感染症が爆発的に流行した世界で、ウイルスと戦う人々の姿を描いた映画を１０年ほど前に鑑賞しました。当時、もし似たような状況が現実に起きたら、学校はどうなるのか、保健室はどうなるのかと恐怖を覚えたことを近頃よく思い出します。

現実の世界で新型ウイルスの流行を目の当たりにしている今、保健室で何をしているかというと、「手を洗おう」「咳エチケットを守ろう」という、風邪やインフルエンザの流行を防ぐために呼びかけてきたことと同じことを発信しています。もちろんコロナウイルスは感染力が強いため、私たちもいつも以上に慎重にはなりますが、子どもたちが健康に対して積極的に行動できるよう働きかけることは、どんな状況でも同じであり、特別なことをするわけではないのだと気づかされました。

子どもたちもかなり気を付けているようで、ハンドソープや消毒液がものすごいスピードでなくなっていきます。先日、何気なくみていた低学年の手洗いは、指の間や手首までしっかり洗えていて「え！みんなこんなに手洗い上手だったっけ？」と驚かされました。マスクについても、子どもたちは気温が高い中、「暑い暑い」と言いながらしっかりと着けており、その姿に日々感心しています。家庭や学校で何度も感染症についての情報を得て、子どもたちなりにコロナ禍を生きる力を少しずつ身につけてきているのだと思います。

また、水飲み場の共用を避けるための水筒持参や、毎朝の検温など、ご家庭の協力もなくてはならない力だと実感しています。

今回身につけた感染症に対する知識や行動は、これからの人生でも大いに役に立つ、自分たちを守ってくれる財産になります。それを確実に実践していくことが、第二波、第三波への備えとして大切なことなのだと感じています。

～第２波の到来に備えて思うこと～

聖ウルスラ学院英智高等学校
養護教諭　大学　佳乃子

異例の臨時休校中に始まった令和２年度。全国で新型コロナウイルスの感染が拡大し、緊急事態宣言が出され、日々状況が変わる中で、私は養護教諭としていったい何をどうしたら良いのか、不安ばかりが先行していました。感染症対策に加え、健康診断や救急対応、悩み相談など…気付けばあっという間に前期が終わろうとしていて、怒涛の半年間でした。

休校中は、衛生用品の手配・準備に苦労し、消毒液や、消毒用のボトル、ペーパータオル、ハンドソープ、体温計など、欲しいものはどこでも品薄高価で、購入するには数量制限もあり十分に数を揃えることが困難な状況で、どのように買い揃えるか苦戦しました。そして、手に入れられた限られた物で、毎日１人で暗く静かな校舎内の消毒を行っていたあの日々は、１日がとても長く感じられました。

学校再開後は、保健室への来室者が前年の２．６倍（１日平均２０～３０人）と、毎時間満員で椅子が足りなくなるほど大盛況でした。ですが、それほどにも新型コロナウイルスが、身体だけでなく心にも大きく影響を与えたことを実感し、１人一人の想いに耳を傾けて寄り添い、心のケアも大切にしました。

生徒全員に『新しい生活様式』が定着しているか、と問われたらまだまだ課題はありますが、「意識が変わり定着しつつある」という状況でしょうか。感染予防の基本は、幼いころからずっと指導されてきた日常の手洗いや掃除を緩まず実行することです。 “今は特別”という気持ちで行ってきた感染予防対策も、これからは生活の中で“当たり前”に行っていけるようにしなければいけません。マスクを着用すること、毎朝検温すること、こまめに手洗いや手指の消毒を行うこと、友達と近づき過ぎないこと、清掃時にアルコール噴霧を行うこと等、“当たり前”になって身についてきましたか？きっと、これらを過度に意識することなく行えることが、『新しい生活様式』の定着、そして第２波、第３波への備えに繋がるのだと思います。

報告と感謝

新型コロナウイルス感染拡大に備えて令和２年２月末政府が緊急事態宣言を出したことを踏まえ、3 月に入ると首都圏や京阪神を中心に大学や学校、幼稚園が臨時休校、休園に入りました。宮城県の公立学校もそれに準じたことから、聖ウルスラ学院では、卒園式や卒業式は参列者制限を設け、入園式や入学式は見合わせました。

4 月から５月にかけて、園児、児童・生徒の登園、登校は、時間短縮や自宅での課題学習、オンラインでの取り組みなどできる限りの緊急事態対応を行いました。学習に対する意欲の低下を防ぎ、逆境に置かれても学力の維持増進を図るための対応でした。

感染が猛威を振るう世情にあって、消毒液やマスクなどが極端に不足し、薬局、薬店などでの入手困難になっていました。そのような時にあって、関係各位から、学校法人聖ウルスラ学院に対しまして感染予防の消毒液、マスクなど多大なご寄付を頂きました。ご寄付は、**別添「ご寄付一覧」**のとおり、**企業・法人・個人名と金額等**を掲載させていただきました。こうしたご厚意は学校法人聖ウルスラ学院に寄せられた**「心の応援歌」**であると受け止めております。

あらためて、ここにご報告と感謝を申し上げます。

なお、「第 40 号」まで続いてきた聖ウルスラ学院の「学院報」（英智報）は、幼稚園、小・中学校、高等学校の教育活動や栄光の記録などをカラー写真を多用した製本の体裁でしたが、上記のような緊急事態下にあって、**「第 41 号」**は従来の編集方針を大きく変えざるをえませんでした。それでもあえて**臨時号**のような形で発行したのは、学校法人聖ウルスラ学院がコロナウイルス感染予防とどのように対応したのか、その取り組みについての記録を後世に残すためであったことをご理解頂きたいと存じます。

学院報「臨時号」に寄稿頂きました各位に御礼申し上げ、ご挨拶にかえさせて頂きます。

令和 2 年 10 月　　学校法人聖ウルスラ学院
法人事務局長（編集担当）
髙　橋　直　見